



**E-ASIA**  
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

# 絵本の春

## 泉鏡花

底本：「泉鏡花集成 8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 5 月 23 日第 1 刷発行

# 絵本の春

## 泉鏡花

もとの<sup>やしきまち</sup> 邸 町の、荒果てた土塀が今もそのままになっている。……雪が消えて、まだ間もない、乾いたばかりの——山国で——石のごつごつした狭い小路が、霞みながら 一 条 煙のように、ぼっと<sup>たそが</sup> 黄 昏<sup>ゆ</sup>れて行く。

やよい 弥 生の末から、ちつとずつの遅速はあっても、花は 一<sup>いつとき</sup> 時に咲くので、その一な<sup>つばき</sup> らびの塀の内に、桃、紅梅、 椿 も桜も、あるいは満開に、あるいは初々しい花に、色香を装っている。石垣の草には、<sup>ふき</sup> 踏 の<sup>とう</sup> 臺も萌えていよう。特に桃の花を<sup>まっさき</sup> 真 先に挙げたのは、むかしこの一廓は桃の組といった組屋敷だった、と聞くからである。その樹の名木も、まだそっちこちに残っていて<sup>うららか</sup> 麗 に咲いたのが……こう目に見えるようで、それがまたいかにも寂しい。

二条ばかりも<sup>かさな</sup> 重 くて、美しい<sup>おんな</sup> 婦 の<sup>しいた</sup> 虐 げられた——旧藩の頃にはどこでもあり<sup>きた</sup> 来 りだが——伝説があるからで。

とおりみち 通 道 というでもなし、花はこの<sup>きんじょ</sup> 近 処 に名所さえあるから、わざとこんな裏小

路を<sup>さぐ</sup> 搜 るものはない。日 中もほとんど人通りはない。<sup>としごろ</sup> 妙 齢 の娘でも見えようものなら、白昼といえども、それは崩れた土塀から影を<sup>あら</sup> 顕 わしたと、人を驚かすであろう。

その癖、妙な事は、いま頃の日の暮方は、その名所の山へ、絡<sup>らくえき</sup>繹として、花見、遊山に出掛けるのが、この前通りの、優しい大川の小橋を渡って、ぞろぞろと帰って

来る、男は膚<sup>はだぬ</sup>脱ぎになって、手をぐたりとのめり、女が媚<sup>なまめ</sup>かしい友<sup>ゆうぜん</sup>染の

つまばしより<sup>くわえようじ</sup>、くわえようじ、よっぱらい<sup>よっぱらい</sup>、よっぱらい、浮かれ浮かれた人数が、前後に揃って、この小路をぞろぞろ通るように思われる……まだその上に、小橋を渡る

あしおと<sup>あしおと</sup>、あしおと、左右の土塀へ、そこを踏むように、とろとろと響いて、しかもそれが手に取るように聞こえるのである。

——このお話をすると、いまでも私は、まざまざとその景色が目に浮ぶ。——

ところで、いま言った古小路は、私の家から十町余りも離れていて、縁で<sup>なが</sup>視めても、

二階から伸上っても、それに……地方の事だから、板<sup>いたぶき</sup>葺屋根へ上ってしても、実

は<sup>たてつらな</sup>建<sup>にぎやか</sup>連<sup>まちや</sup>った<sup>賑</sup>な町家に隔てられて、その方角には、橋はもとよりの事、

川の<sup>ながれ</sup>流も見えないし、小路などは、たとい見えても、松杉の立木一本にもかくれ

てしまう。……第一見えそうな位置でもないのに——いま言った<sup>たそがれ</sup>黄昏になる頃は、

いつも、窓にも縁にも一杯の、川向うの山ばかりか、我が家の町も、<sup>かど</sup>門も、<sup>てすり</sup>欄干も、

<sup>ふすま</sup>襖も、居る畳も、ああああ我が影も、<sup>もうろう</sup>朦朧と見えなくなって、国中、町中にただ

ひとすじ<sup>しずか</sup>、ひとすじ、その桃の古小路ばかりが、漫々として波の<sup>そうかい</sup>静な<sup>ひ</sup>蒼海に、船脚を曳

いたように見える。見えつつ、面白そうな花見がえりが、ぞろぞろ橋を渡る<sup>あしおと</sup>足音が、約

束通り、とととと、どど、ごろごろと、且つ乱れてそこへ響く。……<sup>かすか</sup>幽に人声——女

らしいのも、ほほほ、と聞こえると、<sup>ひもも</sup>緋桃がぱッと色に乱れて、夕暮の桜もはらはらと

散りかかる。……

じか  
直接に、そぞろにそこへ行き、小路へ入ると、寂しがって、気味を悪がって、たれ  
誰も  
通らぬ、更に人影はないのであった。

けはい  
気勢はしつつ、……橋を渡る音も、へだた  
隔って、聞こえはしない。……

まっか  
桃も桜も、真紅な椿も、濃い霞に包まれた、おぼろ  
朧も暗いほどの土塀のひとところ  
処  
に、石垣をよじのぼ  
攀上るかくつつと附着いて、……つつじ、藤にはまだ早い、——荒庭の中を  
のぞ  
覗いている——かすり  
緋の筒袖を着た、頭の円い小柄な小僧の十余りなのがぽつん  
と見える。

そいつは、……私だ。

こずえ  
夢中でぽかんとしているから、もう、とっぷり日が暮れて塀越の花の梢こずえに、  
おぼろづき  
朧月のややななめ斜なのが、湯上りのように、薄くほんのりとしてのぞ  
覗くのも、そ  
いつは知らないらしい。

きれ  
ちょうど吹倒れた雨戸を一枚、拾って立掛けたような破れた木戸が、裂めだらけに  
とざ  
閉してある。そこを覗いているのだが、枝ごし葉ごしの月が、ぼうとなどったしらかみ白紙  
で、木戸の肩に、「貸本」と、かなで染めた、それがほのかに読まれる——紙が樹の  
くま  
隈を分けた月の影なら、字もただ花とつぼみ蒼つぼみを持った、桃のひとえだ  
一枝であろうも知れ  
ないのである。

そこへ……小路の奥の、森のおお覆った中から、葉をざわざわと鳴らすばかり、脊の

高い、色の真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>な、大柄な<sup>おんな</sup>婦<sup>め</sup>が、横町の湯の帰<sup>かえり</sup>途と見える、……化粧道具

と、手<sup>て</sup>拭<sup>ぬぐい</sup>を絞ったのを手にして、陽気はこれだし、のぼせもした、……微<sup>ほろ</sup>酔<sup>よい</sup>も  
そのまま、ふらふらと花をみまわしつつ近づいた。

巢から落ちた木<sup>みみ</sup>菟<sup>ずく</sup>の雛<sup>ひよ</sup>ツ子のような小僧に対して、一種の大なる化<sup>け</sup>鳥<sup>ちよう</sup>であ  
る。大女の、わけて櫛<sup>く</sup>巻<sup>しまき</sup>に無雑作に引<sup>ひ</sup>束<sup>つた</sup>ねた黒髪の房々とした濡色と、色の  
白さは目覚ましい。

「おやおや……新坊。」

小僧はやっぱり夢中でいた。

「おい、新坊。」

と、手拭で頬<sup>ほ</sup>邊<sup>ぺた</sup>を、つるりと撫<sup>な</sup>でる。

「あッ。」

と、肝を消して、

「まあ、おば<sup>お</sup>小母<sup>ぼ</sup>さん。」

か  
ベソを搔いて、顔を見て、

「御免なさい。御免なさい。おとつ<sup>お</sup>父<sup>とつ</sup>さんに言<sup>い</sup>って<sup>や</sup>は可<sup>い</sup>厭<sup>や</sup>だよ。」

と、あわれみを乞いつつ言った。

不<sup>す</sup>気<sup>ご</sup>味<sup>ご</sup>に<sup>い</sup>凄<sup>い</sup>、魔の小路だというのに、<sup>おんな</sup>婦<sup>め</sup>が一人で、湯帰りの<sup>ちかみち</sup>捷<sup>ち</sup>徑<sup>みち</sup>を  
あやし<sup>あ</sup>怪<sup>やし</sup>んでは不<sup>い</sup>可<sup>け</sup>い。……実はこの小母さんだから通ったのである。

つい、(乙)の字なりに<sup>うね</sup>畝<sup>ね</sup>った小路の、大川へ出口の小さな二階家に、<sup>すま</sup>独身<sup>ま</sup>で住

って、門<sup>かど</sup>に周易の看板を出している、小母さんが既に魔に近い。<sup>おんな</sup>婦<sup>め</sup>でト<sup>う</sup>筮<sup>ない</sup>

をするのが怪しいのではない。小僧は、もの心ついた四つ五つ時分から、親たちに聞いて知っている。大女の小母さんは、娘の時に一度死んで、通夜の三日の真夜中によみがえ蘇生<sup>よみがえ</sup>った。その時分から酒を飲んだから酔って転寝<sup>うたたね</sup>でもした気でいたろう。力はあるし、棺桶<sup>かんおけ</sup>をめりめりと鳴らした。それが高島田だったというからなお稀有<sup>けぶ</sup>である。地獄も見て来たよ——極楽は、お手のものだ、と<sup>うらない</sup>筮<sup>たなごころ</sup>ごときは<sup>掌</sup>である。且つ寺子屋仕込みで、本が読める。五経、文選<sup>もんぜん</sup>すらすらで、書がまた好<sup>よ</sup>い。一度冥途<sup>めいど</sup>を<sup>したし</sup>つてからは、仏教に親<sup>したし</sup>んで参禅もしたと聞く。——小母さんは寺子屋時代から、小僧の父親とは手習<sup>てならいほうばい</sup>傍輩<sup>や</sup>で、そう毎々でもないが、時々は<sup>ゆきき</sup>往来<sup>や</sup>をする。何ぞの用で、小僧も使いに遣られて、煎餅<sup>せんべい</sup>も<sup>もら</sup>貰えば、小母さんの<sup>み</sup>易<sup>ししゅう</sup>をとる七星を刺<sup>ゆきもど</sup>繡<sup>ゆきもど</sup>した黒い幕を張った部屋も知っている、その<sup>ゆきもど</sup>往<sup>ゆきもど</sup>戻<sup>ゆきもど</sup>りから、フトこのかくれた小路をも覚えたのであった。

この魔のような小母さんが、出口に控えているから、<sup>あやし</sup>怪<sup>おそろし</sup>い<sup>あら</sup>可<sup>あら</sup>恐<sup>あら</sup>いものが<sup>あら</sup>顕<sup>あら</sup>われようとも、それが、小母さんのお<sup>なかま</sup>夥<sup>なかま</sup>間<sup>なかま</sup>の気がするために、何となく<sup>こころやす</sup>心<sup>こころやす</sup>易<sup>こころやす</sup>くつて、いつの間にか、小児<sup>こども</sup>の癖<sup>こども</sup>に、場所柄を、さして<sup>はばか</sup>憚<sup>はばか</sup>らないでいたのである。が、学校をなまけて、不思議な木戸に、「かしほん」の庭を覗くのを、父親の傍輩に見つか<sup>てんぐ</sup>ったのは、天<sup>てんぐ</sup>狗<sup>あ</sup>に逢<sup>あ</sup>ったほど可<sup>あ</sup>恐<sup>あ</sup>しい。

「内へお寄り。……さあ、一緒に。」

優しく<sup>せな</sup>背<sup>せな</sup>を押したのだけれども、小僧には襟首を<sup>つま</sup>抓<sup>つま</sup>んで引立てられる気がして、手足をすくめて、<sup>ある</sup>宙<sup>ある</sup>を歩<sup>ある</sup>行<sup>ある</sup>いた。

「<sup>ふと</sup>肥っていても、湯ざめがするよ。——もう春だがなあ、夜はまだ寒い。」

と、納戸で<sup>ひふ</sup>被布を着て、朱の<sup>ながぎせる</sup>長煙管を片手に、

「新坊、——あんな処に、一人で何をしていた？……小母さんが易を立てて見てあげよう。二階へおいで。」

月、星を左右の幕に、祭壇を背にして、詩経、史記、二十一史、十三經<sup>ちゆうそ</sup>注疏なん

ど本箱がずらりと並んだ、手習机を前に、ずしりと一杯に、<sup>ざぶとん すわ</sup>座蒲団に<sup>おい</sup>坐って、<sup>のどか</sup>蔽

のかかった火桶を引寄せ、顔を見て、ふとった頬でニタニタと笑いながら、<sup>のどか</sup>長閑に

<sup>たばこ</sup>煙草を吸ったあとで、<sup>ひじ</sup>円い肘を白くついて、あの天眼鏡というのを取って、ぴたりと

額に当てられた時は、小僧は<sup>ぞっ</sup>悚然として<sup>ふるいあが</sup>震上った。

大川の瀬がさっと聞こえて、片側町の、岸の松並木に風が渡った。

「……かし本。——ろくでもない事を覚えて、<sup>こいつ</sup>此奴めが。こんな変な場処まで捜しま

わるようでは、あすこ、ここ、町の本屋をあら方あらしたに違いない。道理こそ、<sup>とつ</sup>お父

さんが大層な心配だ。……新坊、小母さんの<sup>ひざ そば</sup>膝の傍へ。——気をはっきりとしな

いか。ええ、あんな裏土塀の壊れ木戸に、かしほんの<sup>はりふだ</sup>貼札だ。……そんなものが

あるものかよ。いまも現に、小母さんが、おや、新坊、何をしている、としばらく<sup>じつ み</sup>熟と視

ていたが、そんなはり紙は<sup>け</sup>気も影もなかったよ。——何だとえ？……屋間来て見ると

何にもない。……日の暮から、夜へ掛けてよく見えると。——それ、それ、それ見な、

これ、新坊。坊が立っていた、あの土塀の中は、もう<sup>うち</sup>家が壊れて草ばかりだ、誰も居

ないんだ。荒庭に古い<sup>ほこら</sup>祠が一つだけ残っている……」

ひとり うなず  
と言いかけて、ふと 独 で 頷 いた。

「こいつ、学校で、勉強盛りに、親がわるいと言うのを聞かずに、夢中になって、余り

凝るから魔が魅した。ある事だ。……枝の形、草の影でも、かし本の字に見える。新

坊や、可<sup>こ</sup>恐<sup>わ</sup>い処だ、あすこは可<sup>こ</sup>恐<sup>わ</sup>い処だよ。——聞きな。——おそろしくなって帰れな

かったら、可<sup>よ</sup>い、可<sup>よ</sup>い、小母さんが、町の坂まで、この川土手を送ってやろう。

——旧藩の頃にな、あの組屋敷に、忠義がった侍が居てな、御主人の難病は、

みみみみ いきぎも  
巳巳巳巳、巳の年月の揃った若い女の 生 肝 で治ると言っ、——よくある事さ。い

ずれ、主人の方から、内証で入費は出たろうが、金<sup>かね</sup>子にあかして、その頃の事だから、

人買の手から、その年月の揃ったという若い女を手に入れた。あろう事か、ま<sup>ま</sup>ないた  
組

はな<sup>は</sup>なかろうよ。雨戸に、その女を赤 裸 で 銚<sup>かすがい</sup> で打ったとな。……これこれ、まあ、

聞きな。……ま<sup>ま</sup>しろ  
真 白 な腹をずぶずぶと刺いて開いた……待ちな、あの木戸に立掛け

た戸は、その雨戸かも知れないよ。」

「う、う、う。」

小僧は息を引くのであった。

むご  
「酷<sup>むご</sup> たらしい話をするとお思いでない。——聞きな。さてとよ……生肝を取って、

つぼ ばいしん うがい きよ あさがみしも  
壺 に入れて、組屋敷の 陪 臣 は、行水、 嗽 に、身を 潔 め、麻 上 下 で、

主人の邸へ持って行く。お 傍 医 師 が心得て、……これだけの薬だもの、念のため、

生肝を、生<sup>しょう</sup> のものを見せてからと、御 前 で壺を開けるとな。……血 肝<sup>ちぎも</sup> と思つた

まっか ぬかぶくろ じゃこういり  
真 赤 なのが、糠 袋 よ、なあ。麝 香 入 の匂袋でもある事か——坊は知る

はだみ  
まい、女の膚身を湯で磨く……気取ったのは 鶯 のふんが入る、糠袋が、それ  
でも、殊勝に、思わせぶりに、びしょびしょぶよぶよと濡れて出た。いずれ、身勝手な  
やまい  
—— 病 のために、女の生肝を取ろうとするような殿様だもの……またものは、帰  
って、腹を割いた さ おんな 婦 の死体をあらためる ひま 隙 もなしに、やあ、血みどれになって、  
まだ動いています、とおのが手足を、ばたばたと遣りながら、お目通、庭前  
き  
で斬られたのさ。

ほこら  
いまの 祠 は……だけれど、その以前からあったというが、そのあとの邸だよ。も  
っとも、幾たびも代は替った。

——余りな話と思おうけれど、昔ばかりではないのだよ。現に、小母さんが覚えた、  
おとし  
……ここへ一昨年越して来た当座、——夏の、しらしらあけの事だ。——あの土塀の  
処に人だかりがあつて、がやがや騒ぐので行ってみた。若い男が倒れていてな、……  
川向うの新地帰りで、——小母さんもちょっと見知っている、ちとたりないほどの色男  
なんだ——それが……いしゃ 醫師も駆附けて、からだ しら 身体を 検 べると、あんぐり開けた、ロー  
もみ  
杯に、紅絹の糠袋……」

「……………」

ほおば のど つま ふさが  
「糠袋を頬張って、それが咽喉に詰って、息が塞 かって死んだのだ。どうやら手  
が届いて息を吹いたが。……あとで聞くと、月夜にこの小路へ入る、美しいお嬢さん  
の、湯上りのあとをつけて、そして、何だよ、無理に、何、あの、何の真似だか知らな  
いが、お嬢さんの舌をな。」

と、小母さんは白い顔して、ぺろりとその まっか 真紅な舌。

小僧は太い白蛇に、頭から舐められた。

「その舌だと思ったのが、咽喉へつかえて気絶をしたんだ。……舌だと思ったのが、糠袋。」

とまた、ぺろりと見せた。

「いや、厭だ、小母さん。」

「大丈夫、私がついているんだもの。」

「そうじゃない。……小母さん、僕もね、あすこで、きれいなお嬢さんに本を借りたの。」

「あ。」

と円い膝に、揉み込むばかり手を据えた。

「もう、見たかい。……ええ、高島田で、紫色の衣ものを着た、美しい、気高い……十

八九の。……ああ、悪戯をするよ。」

と言った。小母さんは、そのおばけを、魔を、鬼を、——ああ、悪戯をするよ、と

ひとりごと  
独言して、その時はじめて真顔になった。

私は今でも現ながら不思議に思う。昼は見えない。逢魔が時からはおぼろ

あらずして解る。が、夜の裏木戸は小児心にも遠慮される。……かし本の紙ば

かり、三日五日続けて見て立つと、その美しいお嬢さんが、他所から帰ったらしく、

せな背へ来て、手をとって、荒れた寂しい庭を誘って、そのほこらの扉を開けて、燈明の

影に、絵で知ったよろい鎧びつのような一具の中から、一冊の草双紙を。……

「——絵解をしてあげますか……（註。草双紙を、幼いものに見せて、母また姉など

の、話して聞かせるのを絵解と言った。)——読めますか、仮名ばかり。」

「はい、読めます。」

「いい、お<sup>こ</sup>見ね。」

きつね格子に、その半身、やがて、たけた顔が<sup>のぞ</sup>覗いて、見送って消えた。

その草双紙である。一冊は、夢中で我が家の、<sup>はしごだん</sup>階子段を、父に見せまいと、駆  
上る時に、——帰ったかと、声がかかって、ハッと<sup>ふところ</sup>思う、……<sup>う</sup>懐中に、どうしたか失  
せて見えなくなった。ただ、内へ帰るのを待兼ねて、大通りの露店の<sup>ともしび</sup>灯影に、<sup>ある</sup>歩  
きながら、ちらちらと見た、絵と、かながきの処は、——ここで小母さんの話した、——  
後のでない、前の巳巳巳の話であった。

私は今でも、不思議に思う。そして面影も、姿も、川も、たそがれに油を敷いたように  
目に映る。……

大正…年…月の中旬、<sup>たいう</sup>大雨の日の<sup>うま</sup>午の頃から、その大川に洪水した。——水  
が<sup>やわらか</sup>軟に<sup>ながれ</sup>綺麗で、<sup>ながれ</sup>流が優しく、瀬も荒れないというので、——昔の人の心で  
あろう——名の上へ女をつけて呼んだ川には、不思議である。

明治七年七月七日、大雨の降続いたその七日七晩めに、町のもう一つの大河が  
<sup>おそろし</sup>可<sup>かさ</sup>恐<sup>ひとじに</sup>い洪水した。七の数が<sup>おびただ</sup>累<sup>おびただ</sup>なって、人<sup>おびただ</sup>死も<sup>おびただ</sup>夥<sup>おびただ</sup>多<sup>おびただ</sup>しかった。伝説じみる  
が事実である。が、その時さえこの川は、<sup>とこなつ</sup>常<sup>べに</sup>夏<sup>そそ</sup>の花に<sup>そそ</sup>紅<sup>そそ</sup>の口を<sup>そそ</sup>漱<sup>そそ</sup>がせ、柳の  
影は黒髪を解かしたのであったに——

もつとも、話の中の川<sup>かわづつみ</sup> 堤<sup>めめき</sup>の松並木が、やがて柳になって、町<sup>めめき</sup>の目貫へ続く

処に、木造の大橋があったのを、この年、石に架<sup>かけ</sup>かえた。工事七分という処で、

はしぐい  
橋<sup>はしぐい</sup> 杭<sup>はしぐい</sup>が鼻の穴のようになったため水を驚かしたのであろうも知れない。

さいわい  
僥<sup>さいわい</sup> 倖<sup>さいわい</sup>に、白昼の出水だったから、男女に死人はない。二階家はそのまま、辛

しの  
うじて凌<sup>しの</sup>いたが、平屋はほとんど濁流の瀬に洗われた。

若い時から、諸所を漂<sup>さすら</sup>泊<sup>はて</sup>った果<sup>はて</sup>に、その頃、やっと落着いて、川の裏小路に二階

がり  
借<sup>がり</sup>した小僧の叔母にあたる年<sup>おば</sup>寄<sup>としより</sup>がある。

水の出盛った二時半頃、裏<sup>むき</sup> 向<sup>むき</sup>の二階の肱<sup>ひじ</sup> 掛<sup>かけ</sup> 窓<sup>まど</sup>を開けて、立ちもやらず、坐

りもあえず、あの峰へ、と山に向って、膝<sup>ひざ</sup>を宙に水を見ると、肱<sup>ひざ</sup>の下なる、

ひさしやね  
廂<sup>ひさしやね</sup> 屋根<sup>ひさしやね</sup>の屋根板は、鱗<sup>うろこ</sup>のように戦<sup>おのの</sup>いて、——北国の習<sup>ならわし</sup> 慣<sup>おし</sup>に、圧<sup>おし</sup>にの

せた石の数々はわずかに水を出た<sup>かわら</sup> 積<sup>かわら</sup>であった。

つい目の前を、ああ、島<sup>しま</sup> 田<sup>たま</sup> 鬻<sup>まげ</sup>が流れる……緋<sup>ひ</sup> 鹿<sup>かの</sup> 子<sup>こ</sup>の切<sup>きれ</sup>が解けて浮いて、トち

らりと見たのは、一<sup>ひと</sup> 条<sup>すじ</sup>の真<sup>ま</sup> 赤<sup>あか</sup>な蛇。手箱ほど部の<sup>かさな</sup> 重<sup>かさな</sup>った、表紙に彩<sup>さい</sup> 色<sup>しき</sup> 絵<sup>え</sup>

の草紙を巻いて——鼓の転がるように流れたのが、たちまち、紅<sup>べに</sup>の雫<sup>しずく</sup>を挙げて、

その並木の松の、就<sup>なかん</sup> 中<sup>ずく</sup>、山より高い、二三尺水を出た幹を、ひらひらと昇って、

声するばかり、水に<sup>むせ</sup> 咽<sup>むせ</sup>んだ葉に隠れた。——瞬く間である。——

そこら、屋敷小路の、荒廢離落した低い崩<sup>くずれ</sup> 土<sup>ど</sup> 塀<sup>べい</sup>には、おおよそ何百年来、い

かばかりの蛇が巣くっていたろう。蝮<sup>まむし</sup>が多くて、水に浸った軒々では、その害を被

ったものが少くない。

高台の職人の<sup>くつきょう</sup>屈<sup>な</sup>竟<sup>な</sup>のが、二人ずれ、翌日、水の引際を、炎天の下に、大川  
ぞい<sup>ながれ</sup>添<sup>あまり</sup>を見物して、流<sup>の</sup>の末一里有<sup>あ</sup>余、海へ出て、暑さに泳いだ豪傑がある。

荒海の<sup>いそばた</sup>磯<sup>ざあ</sup>端<sup>と</sup>で、肩を合わせて一息した時、息苦しいほど蒸暑いのに、颯<sup>ざあ</sup>と風  
の通る音がして、思わず脊筋も<sup>ぞっ</sup>悚然とした。……振返ると、白浜一面、早や乾いた  
いきれ<sup>なか</sup>蒸<sup>すき</sup>気の裡<sup>く</sup>に、透<sup>い</sup>なく打った細い杭と見るばかり、幾百条とも知れない、おなじよ  
うな蛇が、おなじよう<sup>さま</sup>な状<sup>し</sup>して、おなじように、揃って一尺ほどずつ、砂の中から鎌首  
もた<sup>うね</sup>を擡<sup>る</sup>げて、一斉に空を仰いだのであった。その<sup>うね</sup>畝<sup>る</sup>の時、齒か、鱗か、コツ、コツ、コ  
ツ、カタカタカタと鳴って響いた。——洪水に巻かれて落ちつつ、はじめて<sup>やわらか</sup>柔<sup>い</sup>い  
地を知って、砂を<sup>うが</sup>穿<sup>い</sup>って活きたのであろう。

きゃッ、と云うと、島が<sup>まんなか</sup>真<sup>からだ</sup>中<sup>は</sup>から裂けたように、二人の身<sup>は</sup>体<sup>は</sup>は、浜へも返さず、  
なみうちぎわ<sup>つぶて</sup>浪<sup>はだか</sup>打<sup>身</sup>際<sup>で</sup>をただ礫のように左右へ飛んで、裸<sup>で</sup>身<sup>で</sup>で逃げた。

大正十五(一九二六)年一月

底本：「泉鏡花集成 8」ちくま文庫、筑摩書房  
1996（平成 8）年 5 月 23 日第 1 刷発行

入力：本山智子

校正：門田裕志

2001 年 6 月 25 日公開

2005 年 9 月 26 日修正

青空文庫ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/)  
で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで  
す。